

第3学年 国語科学習指導案

日 時 平成22年10月1日(金)5校時

学 級 3年A組 男16名 女17名 計33名

授業者 教諭 大内 唯子

1 単元名 未来に向かって 「15歳のエッセーを書こう」

2 単元について

(1) 教材観

本単元では、働くことに対する見方や価値観に関するエッセーを書く言語活動に取り組む。「エッセーを書く」という活動を通して、素直に自分の気持ちを伝え合う力を高め、言語感覚を豊かにするために、「書くこと」の指導を行う。教科書の単元の配列では、最後にあたる「未来に向かって」であるが、高校進学を目の前にし、働くことを見据えた進学先や、自分自身を見つめる必要があるこの時期に、未来の自分に送る手紙に添える文章として、エッセーが適していると考えた。15歳の今、職業や働くことに対する自分の思いを素直な形で表現し、互いに交流する中で、勤労観や職業観を深めることにも役立つと思われる。

エッセーは、文学の一形式であるが、中学生にとって、自分の思い等を表現するのに、抵抗が少ない形式である。また、エッセーは、筆者によって様々な情景描写、心情表現が用いられている。そのため、様々なエッセーを読むことで、構成や表現の工夫の多様性に触れることができ、豊かな言語感覚を学ぶことができる。修辞技法(レトリック)や会話文を自分の意図に応じて使い、文章を豊かな表現で書く能力を身に付けさせるとともに、文章を書いて互いに交流することで、考えを深めようとする態度を育てることができると思われる。

(2) 生徒観

これまでに、さまざまなテーマで作文を書いたりする機会はあったが、状況や気持ちを表現する場合、「悲しい」「おもしろかった」等の画一的な言葉で書くことが多く、一人一人の表現に個性があまりみられない。また、「何のために、誰に読ませるものか」等の目的意識が薄く、何度も推敲し、よりよい作品を作ろうとする意識は低い。今回、「未来の自分にあてる手紙を書く」ことを目的とすることで意識が高まると考える。

進路や生き方に関わるアンケートをとったところ、現在将来なりたい職業をイメージできる生徒は、全体の48%である。2年生のときに職場体験を行い、働く人の気持ちや思い、やりがい等を学んだが、自分自身の将来については、はっきりしていない生徒が多い。未来の自分にあてて、働くことに対する見方や価値観に関するエッセーを書く活動を通し、勤労観・職業観を深め、自分自身の将来を考えることができると思われる。

(3) キャリア教育との関わり

3年生の現在、部活動が終わり、自分の進路を含め自分自身を見つめ直す時期である。自分の勤労観・職業観に対する考えを深め、更に思いや考えを表現する力を付けさせたい。

本単元でのキャリア教育に関してのねらいは、次の2点である。

- ・適切に表現する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、言語感覚を磨き、コミュニケーション能力を育成する。 『総合生活力』〈豊かな人間性〉【人間関係調整能力】
- ・ボランティア活動、家事や手伝い、その他の役割から、働くことへの見方や考え方、価値観、心構えをもつ。 『人生設計力』〈勤労観・職業観〉

(4) 指導観

これまで経験してきた、ボランティア活動、家事や手伝い、その他の学校生活での役割から、働くことへの見方や考え方、価値観や心構えをエッセーとして書く活動を通して、職業観・勤労観を深めることができると思われる。また、今まで書いたことのないエッセーという文章の形態ではあるが、中学校3年生としてこれまでの学習を基に取り組むことで、構成や表現の仕方を工夫して書く力を身に付けさせ、伝え合う力を高めたい。

4 単元の目標

- 未来の自分に向けてエッセーを進んで書いたり、「働く」ということについて考えようとしていたりしている。 [関心・意欲・態度]
- 自分の今までの生活の中で、ボランティア活動、家事や手伝い、学校生活での役割等から、材料を集め、適切な構成を工夫してエッセーを書くことができる。 [書くこと ―ア]
- 書いたエッセーを互いに読み合い、話の展開の仕方や表現の仕方について評価して、自分の表現に役立てるとともに、ものの見方や考え方を深めることができる。 [書くこと ―エ]
- 修辞の技法について理解し、文章の中で効果的に使うことができる。 [伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項 イー (イ)]

5 本時の指導

(1) 本時の目標

- ・二つのモデル文を比べて読み、エッセーの特徴について理解しようとし、働くことについて自分なりの文章を書こうとする。 [関心・意欲・態度] 〈勤労観・職業観〉
- ・二つのモデル文を比べて読み、話の展開の仕方や表現の仕方について考え、自分の表現に役立てることができる。 [書くこと ― エ] 【人間関係調整能力】
- ・修辞の技法について理解し、文章の中で効果的に使うことができる。 [言語事項]

(2) 本時の指導にあたって

前時までに、働くことに対する見方や価値観に関わる作文を書き、文章の書き方や効果的な修辞の技法について学習してきた。本時は、2つのモデル文を比べて読み、その違いに気付く言語活動に取り組み、エッセーの特徴や構成、表現の仕方について考え、全体で確認する。また、書き出しと書き終わりに気を付けながら、書き終わりの文章を考えグループで評価しあう。筆者の思いを表現できるよりよい文章になるように、交流し考えを深め、自分の作品に反映させるようにしたい。

(3) 評価規準

評価規準	満足できる	おおむね満足できる	支援を要する生徒への手だて
・二つのモデル文を比べて読み、エッセーの特徴について理解しようとし、働くことについて自分なりの文章を書こうとする。 (関心・意欲・態度) 【勤労観・職業観】	積極的にエッセーの特徴について理解しようとし、働くことについて、自分なりの文章を工夫して書こうとする。	エッセーの特徴について理解しようとし、働くことについて自分なりの文章を書こうとする。	構成や表現の仕方などについて、資料を用いながら考えさせ、他との交流の場を作る。
・二つの文章を比べて読み、話の展開の仕方や表現の仕方について考え、自分の表現に役立てることができる。 (書くこと ― エ) 【人間関係調整能力】	二つのモデル文を読み、常体での表記、わかりやすく簡潔な文章、心情や様子を表す言葉として、修辞の技法が多く用いられる等の特徴、および構成が三部構成(現在・過去・現在)であることを説明でき、互いの考えを伝え合い自分の考えを深めることができる。	二つのモデル文を読み、エッセーの特徴にあたる文章を指摘することができ、構成が三部であることを答えることができ、互いに考えを伝え合い、考えることができる。	時系列を記入しながら、読むようにさせ、表現技法についてはプリントを参考に考えさせる。
・修辞の技法について理解し、文章の中で効果的に使うことができる。 (言語事項)	筆者が祖父にかけたい言葉を、書き始めと関連させ、本文の内容に沿った効果的な修辞の技法を使い、文章を書くことができる。	筆者が祖父にかけたい言葉を、書き始めと関連させながら、修辞の技法を使い、書くことができる。	書き始めと書き終わりの例をまねさせ、どの修辞の技法が効果的かを資料等を利用して考えさせる。

(4) 展 開

過程	学習内容	指導上の留意点	評価
導入 5分	1. 前時の想起 ・前時の内容を想起する。 ・家庭学習で提示している文章の特徴を確認する。 2. 本時の学習課題を確認する。 3. 課題解決の見通しをもつ。	・文章の書き方や修辞の技法を確認する。 ・エッセーとの違いを考えさせる。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center; width: fit-content; margin: 10px auto;"> エッセーの特徴について考えよう。 </div> ・2つのモデル文を提示する。(資料)	
展開 35分	4. 個人で文章を比較して読み、次の視点について全体で考える。 (1) 2つの形態のモデル文を読み比べ、エッセーの特徴について考える。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 「モデル文のエッセーの特徴」 ① 文体は常体。 ② 心情や様子を表す場合、比喩法や擬態法が多く使われる。 ③ 現在・過去・現在の三部構成 ④ わかりやすく簡潔な文章にするために、体言止めや省力法を。 ⑤ 「書き終わり」の工夫 </div> (2) エッセーのモデル文の「書き終わり」の文章を考える <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 「ポイント」 ・書き始めの文章と関連したものにする。 ・エッセーの内容に即したものにする。 ・読み手の心に残る言葉になるように考える。 </div> (3) エッセーのモデル文の「書き終わり」の文章について交流する。 (4) エッセーのモデル文の「書き終わり」の文章について交流したことを発表する。	・個人で考えさせ、なかなかでない場合は、隣り等と考えを交流させる。 ・表現技法や5W1Hにあたる場所に線を引かせる等、メモさせながら読ませるようにする。 ・個人で、最後に筆者が祖父に送りたい文章を考えさせる。 ・書き始めと関連付けて表現させる。 ＊同じ文章を用いながら、変化をつける。 ＊他の文章を引用する。 ＊会話文で終わる。 等 ・どんなところに気を付けて作ったか、どんなところが良いと思ったか等を交流させる。 ・エッセーを書くときに使いたいことをメモしながら、自分や他の文章の良さを考えながら聞かせる。 ・根拠を明らかにしながらグループMVPを決める。 ・根拠を明らかにしながらグループMVPを発表させる。 ・聞き手を意識した声と態度で、要点を押さえ、わかりやすく発表するように意識させる。	[関心・意欲・態度] 2つの形態のモデル文を比べながら読み、エッセーの特徴について考えようとする。 ⇨ ワークシート [書くこと] 2つの形態のモデル文を比べて読み、話の展開の仕方や表現の仕方について考え、自分の表現に役立てることができる。 ⇨ ワークシート [関心・意欲・態度] エッセーの特徴を考えながら、自分なりの文章を書こうとする。 ⇨ ワークシート [言語事項] 修辞の技法について理解し、文章の中で効果的に使うことができる。 ⇨ ワークシート
終末 10分	5. 本時の学習の振り返りをする。 (1) 振り返りを記入する。 (2) 振り返りを交流する。 6. 次時の確認。 ・次時の学習内容を確認する。	・「エッセーの特徴」や書き始めと呼応する等の「書き終わり」の工夫について、本時の学習を通してわかったことや自分の「働くこと」についてのエッセーで生かしたいことを記入させる。 ・友達のリターンを聞き、「エッセーの特徴」や「書き終わり」の工夫について、考えを深めさせる。 ・「働くこと」についての作文をエッセーに書き換えることを確認する。	[関心・意欲・態度] エッセーの特徴を考えながら、自分なりの「働くこと」について文章を書こうとする。 ⇨ ワークシート

資料①

氏名

エッセーの書き出し・書き終わりの例

<p>〔ケース1〕 〔書き始め〕</p> <p>僕は世界中のたいていの猫が好きだけれど、この地上に生きているあらゆる猫の中で、年老いた大きな雌猫がいちばん好きだ。</p>	<p>〔書き終わり〕</p> <p>そんなわけで今でも、僕はこの世界に生きているあらゆる猫の中で、だれがなんといおうと年老いた大きな雌猫がいちばん好きなのだ。</p>
<p>ケーキ、という言葉には実物のケーキ以上の何かがある。私はその何かが好きだ。</p>	<p>何が好きですか、と聞かれて、まよわず、ケーキとこたえるような単純さで私は行きたい。</p>

<p>〔ケース2〕 〔書き始め〕</p> <p>東京で生活することになったら、二つの仕事だけはやってみたいと思っていた。一つは皿洗いで、もう一つはベルトコンベアーの仕事である。</p>	<p>〔書き終わり〕</p> <p>遠い記憶の中のベルトコンベアーが回転ずしでよみがえり、星の数ほど聞いたブツが耳の底の底からバネ仕掛けでぼんぼん飛び出してくるのだ。</p>
<p>自宅の洗濯機の調子がおかしい。途中で止まってしまう。うまく回らない。ぬれて重くなった洗濯物を二つのゴミ袋に入れて、やっと見つけたコインランドリーに入った。</p>	<p>ガタンと鳴って洗濯機の回転が止まった。不思議なものだ。すっかり忘れていたことも鮮明に思い出された。故障した洗濯機に感謝したい気分だった。</p>

〔メモ〕 友達の話や発表を聞いて、メモしよう。



私は、久しぶりにラーメンを食べに行きました。私が、仕事で盛岡を離れ、祖父の作るラーメンを食べなくなつて、十年以上経ちます。もともとラーメンが好きで食べ歩いていましたが、祖父の味以上のものに出会っていません。あのラーメンの味は、祖父の人生そのものだから、もう会えないのかもしれないと思いました。

私の祖父は、満州で修行をして、日本に戻つて、ラーメン屋を開きました。店は盛岡のバスセンターの裏で、八幡さまに通じる道路の四つ角にありました。真夏でもいつも湯気が立ち上つていて、換気扇が回っていました。裏口から店に入ると鶏ガラスープの匂いがしました。いつも祖父は、シミのついた前掛けをつけて、汗をかきながら、調理場の火の前にはいました。置いてある寸胴の中には醤油だれが入っていて、たこ糸でしばられた肉の塊が浮かんでいました。このたれを鶏ガラスープで薄めて、ラーメンのスープにします。たれは毎日、継ぎ足すのですが、味は変わりませんでした。絶対に変えないと言う、味に自信をもっている祖父の強い意志を感じました。

大晦日になると、元朝参りに向かう人がラーメンを食べにくるので、店は忙しくなります。それで、私も手伝いに行きました。たまに友達が来ると、何となく誇らしい気分で注文をとりました。いつのまにか年があらたまつて、仕事が一段落すると、必ずラーメンを食べさせてもらいました。店で出すラーメンのチャーシューは一枚ですが、私には三枚入っていました。忙しい中、お客様の「美味しかったよ」という言葉がうれしくて、返す声も自然に大きくなりました。バイトも何回かしましたが、お客様に対してそんな気持ちになることはなく、私も店のラーメンに誇りをもっているのだと思えました。いつもに「こ」こと迎えてくれる祖父でした。しかし、調理をしている後ろ姿には近寄れない厳しさを感じました。今思うと、一つ一つの料理に手を抜かず、いつも美味しいものをお客さんに出すという職人としての誇りだったと思います。私も仕事に対して、祖父のようにプロでありたいと思います。

「お母さん、ここのうまいね。」という息子に「そうだね」と答えながら、「今日も空振りだなあ。」と思う自分がいました。あの味は、祖父が亡くなったことで一緒に消えてしまったのかもしれない。それでも、私は、この先ずっと祖父の味を探し続けると思います。

「こ」も違う・・・」

久しぶりにラーメンを食べた。仕事で盛岡を離れ、祖父のラーメンを食べなくなつて十年以上。元来ラーメン好きで食べ歩いてきたが、祖父の味以上のものに出会わない。あのラーメンの味は、祖父の人生そのものだから、もう会えないのかもしれない。

祖父は、満州で修行し日本に戻り、ラーメン屋を始めた。盛岡のバスセンターの裏、八幡さまへ通じる道路の四つ角に店はあった。真夏でも、モウモウと湯気が立ち上り、カラカラカラと換気扇が回っている。裏口から店に入ると、鶏ガラスープの匂いがする。いつも祖父は、シミのついた前掛けをつけ、汗をかきながらゴウゴウと音をたてる火の前にはいる。寸胴の中に、たこ糸でしばられた肉の塊が、こつこつした星のように醤油だれの中に浮かんでいる。このたれをガラスープで薄めて、ラーメンのスープができる。たれは毎日継ぎ足されているのに、味は変わらない。変えない。自分の味に自信をもつ祖父の意思を感じた。

大晦日、元朝参りに向かう人々が、年越しそばならぬ年越しラーメンを食べにくる。店は忙しく私も手伝いに行つた。たまに友達が来ると、何となく誇らしげな気分で注文をとつた。いつのまにか年もあらたまり一段落すると必ずラーメンができた。店で出すのは一枚で、私のはチャーシュー三枚だ。忙しい中、お客様の、「美味しかったよ」という言葉がうれしくて、「ありがとうございます！」の声も自然に大きくなる。バイトも何回かしたが、あんな気持ちになることはなかった。私も店のラーメンに誇りをもっていたのかもしれない。

いつもに「こ」こと迎えてくれる祖父だった。しかし、火に向かうときの背中には近寄りがたい厳しさがあった。今思えば、一つ一つの料理に手を抜かず、いつもうまいものを客に出すという職人の誇りだったのだろう。仕事に対し私もプロでありたいと思う。

「お母さん、ここのうまいね。」という息子の言葉に、「そうだね。」と相づちを打ちながら、「今日も空振りだ」と思う自分がある。あの味は、祖父と一緒に消えてしまったのか。それでも、私はこの先ずっと祖父の味を探し続ける。